

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成22年12月3日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 薬学研究科

職 名・学 年 博士課程1回生

氏 名 永 安 一 樹

|       |   |             |          |
|-------|---|-------------|----------|
| 事業区分  | 平成22年度・国際研究集会派遣助成   |             |          |
| 研究集会名 | 40th Annual Meeting Neuroscience 2010 (第40回北米神経科学会)   |             |          |
| 発表題目  | Sustained exposure to selective serotonin reuptake inhibitors induces the augmentation of serotonin release in organotypic raphe slice cultures (抗うつ薬SSRIの縫線核培養切片への持続処置はセロトニン遊離の増強を引き起こす) |             |          |
| 開催場所  | 米国・カリフォルニア州・サンディエゴ  |             |          |
| 渡航期間  | 平成22年11月13日 ~ 平成22年11月18日   |             |          |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(ポスター)   |             |          |
| 会計報告  | 交付を受けた助成金額  | 150,000 円   |          |
|       | 使用した助成金額  | 150,000 円   |          |
|       | 返納すべき助成金額   | 0 円         |          |
|       | 助成金の使途内訳<br>(使用旅費の内容)   | 航空運賃        | 102,030円 |
|       |   | 宿泊代         | 37,756円  |
|       |   | 学会登録料(含参加費) | 18,800円  |
|       |   | 滞在費         | 21,644円  |
|       | (総計)  | 180,230円    |          |
|       | 上記費用に助成金を充当   |             |          |

京都大学教育研究振興財団助成事業  
平成 22 年度国際研究集会派遣助成

成果の概要

京都大学大学院薬学研究科  
生体機能解析学分野 博士課程 1 回生  
永安 一樹

研究集会名：40<sup>th</sup> Annual Meeting Neuroscience 2010 (第 40 回北米神経科学会)

開催場所：アメリカ合衆国・カリフォルニア州・サンディエゴ

渡航期間：平成 22 年 11 月 13 日～平成 22 年 11 月 17 日

1. 研究成果の発表

報告者は、11 月 13 日より 17 日にかけて、学会開催地であるサンディエゴに滞在し、第 40 回北米神経科学会に参加してきた。本学会は、世界中の神経科学者、精神薬理学者が一堂に会する、参加者数 3 万人超の学術集会である。報告者は、最近、抗うつ薬として世界中で用いられている SSRI の作用に関して論文報告を行っているが、本学会においては、その研究内容を含む研究成果についてポスターセッションにて発表を行った。発表内容の概要は以下の 3 点である。

1. 縫線核セロトニン神経含有脳切片培養系が、セロトニン神経機能を有する試験管内実験系として妥当であること
2. 本実験系において、抗うつ薬である SSRI の長期処置が、治療効果と関係すると考えられる細胞外セロトニンレベルを大きく上昇させること
3. この細胞外セロトニンレベルの上昇には、ある種のグルタミン酸受容体の活性化が重要であること

これらの内容についてポスター発表 (572.7: Sustained exposure to selective serotonin reuptake inhibitors induces the augmentation of serotonin release in organotypic raphe slice cultures. (Nagayasu et al.), 添付資料) を行った。発表時間内に国内外 30 人近くの研究者と議論する機会に恵まれ、今後の研究活動において役立つであろう示唆についても得ることができた。聴衆からは、個体動物を用いた実験においてはどのような結果が得られるのか、個体動物で薬物を連続投与した後に切片を作製した場合、どのような結果が得られるのか、といった質問が寄せられ、我々の研究成果および今後の展望に対する関心の高

さが伺われた。

## 2. 本学会参加による成果

本学会に参加することで、ごく最近論文にて報告した内容について世界中の研究者と議論を交わすことができ、本学における研究活動のアピールのみならず、今後、研究活動を行っていく上で参考となる意見についても多数得ることができた。また、神経科学分野、精神薬理学分野における最先端の研究報告に接することができ、また第一線で活動している研究者と直に議論を交わすことができたことは大きな収穫であると考えている。

最後になりましたが、本学術集会参加にあたり、助成を頂きました京都大学教育研究振興財団に心よりお礼申し上げます。貴財団のますますのご発展をお祈り申し上げます。